学　校　研　究

中 学 校

山梨南中学校 …… 47

山梨北中学校 …… 49

笛川中学校 …… 51

塩山中学校 …… 53

松里中学校 …… 55

勝沼中学校 …… 57

山　梨　南　中　学　校

「　場所を問わない学び、デジタルによる新たな学びの追求　」
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につながるクラウド活用～

Ⅰ　研究の内容

1　本年度の研究の重点

これまで「確かな学力の定着と向上」を基本テーマとし、「やまなしスタンダード」をベースとした構造的な授業づくりと家庭学習の定着について研究を行い、多くの成果を挙げてきた。そして一昨年度（令和５年度）は、これまでの研究を継続し、更なる定着と質的向上を目指すと同時に、GIGA スクール構想に伴う ICT 活用を積極的に実践することで、学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んだ。昨年度（令和６年度）は、リーディング DX の研修会を通し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実や校務 DX の推進に向けて研究を進めた。今年度（令和７年度）は、校務 DX 化に向けて、生徒用・教職員用のポータルサイトの作成・運用、情報の一元化を推進した。また、個人研究では、教職員自らが学びたい研修を受講し、スキルの向上を目指した。

2　研究部会

（１）教科別研究会

・「やまなしスタンダード」を取り入れた授業づくり、授業改善
・ICT の利活用、一人一台端末をどのように使っていくか情報交換
・３観点に伴う評価のつけ方
・RG で実施する内容の検討

（２）学年別研究会

・Q-U 検査を分析し、個への対応、集団づくりに励む
・学びの質的向上を目指した学級、学年集団づくり

（３）リーディング DX（昨年度指定校）

・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的、対話的で深い学びを実現する観点から、１人１台端末とクラウド環境を高い頻度で活用し、授業の改善を図る。
・教育課程全体を通じた情報活用能力の育成を特に留意する。
・端末の日常的な持ち帰りによる家庭学習の充実
・校務の徹底的な効率化や、対話的、協働的な研修
・１人１台端末、グループウェア及びクラウド環境を活用した校務の効率化や対話的、協働的な職員会議、教員研修の実施等に取り組む。
・校務用ポータルサイトの作成、運用

（４）学習会

◇DXアドバイザーによる学習会　　令和７年８月　７日（木）実施

講師　　小川　　晋　氏　（春日井市立高森台中学校　教頭）

◇DXアドバイザーによる学習会　　令和７年８月１８日（月）実施

講師　　三井　一樹　氏　（山梨大学　准教授）

◇笛川小中公開研究会

DXアドバイザーによる学習会　　令和７年１１月６日（木）実施

講師　　西田　光昭　氏　（文部科学省学校DX戦略アドバイザー）

（５）個人研究

・個人で研修を２つ以上受講し、授業改善、校務DX化等につなげる。
・研修で得た知識を、生徒に還元する。
・研修内容を全職員と共有し、自身の実践に活かす。

Ⅱ　成果と課題

１　成果

・昨年度、リーディングDXの研修で学んだことを継続して日々の授業で実践する中で、どの場面で端末を活用することがより効果的か、活用方法について情報を共有することができた。
・個人研究では、個人で学びたいことを選択、決定し、調べたことを全体で共有する過程で、自分自身が必要としている知識を得ることができた。また、Canva等の研修会の内容を実践で活用していくことで生徒に還元できた。
・生徒用及び教職員用のポータルサイトの作成、運用によりデータが一元化され、必要なデータをすぐにキャッチすることができ、ICTを効果的に活用できた。

２　課題

・個人研究の推進により、教職員全員で同じ課題（授業実践等）に対して意見を交換する時間が少なかった。
・端末の効果的な活用方法について、使うことが目的ではなく、端末を活用して授業のねらいにせまることが目的ということを今後も意識しながら活用していく。

Ⅲ　成果物

・個人研究記録（全職員分）
・個人研究による各種資料
・生徒用ポータルサイト
・教職員用ポータルサイト

（研究主任　宮本　武彦）

山梨北中学校

Ⅰ 研究主題

自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究

～個別最適な学びの実現に向けたICT活用の在り方～

Ⅱ 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）において、生徒に身につけさせたい資質・能力は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱となっている。それぞれの資質・能力の育成のためには、さらなる学びの質の向上に向けて「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を推進していく必要があることが述べられている（文部科学省、2018）。

本校では、継続研究の最終年度として、「自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究～個別最適な学びの実現に向けた ICT 活用の在り方～」と研究主題を設定し、継続研究に取り組んできた。その中で、①「思考・判断・表現力を高める取組（山北スタイルづくり）」 ②「基礎学力定着の取組」 ③「教材教具の開発・工夫とICT活用」 といった3つの観点から主題に迫るべく研究を進めてきた。

文部科学省から「Society 5.0 時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現するためには、学校現場におけるICTの積極的な活用が不可欠」であることが示され、「GIGA スクール構想」において1人1台端末が整備され、積極的な活用が求められている。また山梨市においても、令和3年度（2021 年）にタブレットが1人に1台貸与され、授業だけでなく、家庭でも日常的に、そして効果的に活用している。

本校は、これまでに蓄積された教育実践を通して、「話し合いの手順や方法、発表のルールの確立」、「生徒が思考するときの視点や方向性のもとになる『問い』づくり」、「まとめと振り返りでの工夫」に取り組み、確実に成果を上げてきた。また、令和元年度から3年度にかけては、山梨県道徳教育推進事業の指定を受け「特別の教科 道徳」の研究に取り組み、「発問の工夫」「振り返りシートを活用した評価文」について議論を重ねた。そして、授業の中で生徒一人ひとりの考えが可視化されることにより、他者参照から多くの気付きを得て、自己の考えを深めることができるように ICT を活用した授業づくりが活発になった。様々な工夫を取り入れ、3年間に及ぶ研究を継続して行う中で、生徒たちが「答えが一つではない道徳的な課題」に向き合い、自己の在り方を問いなおす指導方法を検討することができた。

令和5年度には、文部科学省の「リーディングDXスクール事業」の指定を受け、ICTを活用した個別最適な学びの実現に向けて研究を続け、教科にとどまらず、様々な場面でのICTの活用の実現に取り組むことができた。

そこでAI（人工知能）が発展し、生徒一人ひとりを取り巻く環境も価値観も多様化している現状を鑑み、多様な子供たちに個別最適化の学びの環境を整えていく必要性があると考える。このような時代背景の中、ICTを効果的に取り入れた「個別最適な学びの実現」を通して資質・能力の育成を目指していきたいと考え、主題を設定した。

Ⅲ 研究内容

2 研究内容（具体的取組）

（1）自ら学ぶ力をつける取組（思考力、判断力、表現力等を高める取組）

○授業過程の工夫

課題提示→自立解決→相互解決→まとめ(山北スタイル)

ICT の活用。

（2）基礎学力定着の取組

① 学力を向上させるための学習ノートと学習アプリ（ミライシード）の活用

② 朝読書→読書活動の定着

③ 山北サポートタイム

（3）教材教具の開発・工夫と1人1台タブレットの活用

・主体的・対話的で深い学びに向けた ICT 活用の在り方に関わる事例研究

・各教科における、個別最適な学びに関する教材研究

・各教科の実践事例の共有化（研究授業・1人1実践）

・1人1台タブレット活用に向けた全校統一の取り組みに関する研究

（4）その他の取り組み

・「特別の教科 道徳」については道徳推進教師を中心に研究を深めていく

・QUアンケートを活用した、集団づくりに関する研究

・特別支援教育、通級指導教室に関する研修

・初任者研修を中心とした研究授業の実施

Ⅳ 成果と課題

〈成果〉

・どの授業でも 課題提示→自立解決→相互解決→まとめ(山北スタイル)が定着して、生徒も授業スタイルを把握しやすく学習理解も深まった。

・タブレットの活用は、どの授業でも利活用できている。今後は、個別最適な学習について、教科ごとに実践事例を共有して、さらに学び合っていきたい。

・研究授業を初任者の先生方が行った。教科・学年で授業案を検討し、初任者以外の教員にも学習できる良い機会となった。授業をみんなで参観して、研究会を持つことは全職員にとって、とても勉強になるのでよかった。

・通級教室の考え方や支援が必要な生徒への対応など、適切な手立てがわかり、すぐに実践につなげる研修となった。

〈課題〉

・ICT の効果的な活用については、継続の必要性を感じる。各教科の特色を生かして、活用場面の焦点化や効果についてはさらに研究が必要だと感じる。

・自主学習（家庭学習）については、AI ドリルの効果的な活用と自主学習ノートとの併用について、さらに検討し、有効な活用につなげていきたい。

（研究主任 石井 美保）

山梨市立笛川中学校

主体的に学習に取り組む生徒の育成
～「見方・考え方」を働かせた深い学びを促す指導の在り方～

Ⅰ　研究の内容

1　研究内容

今年度の研究では、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を主題に、見方・考え方を働かせた深い学びを実現する授業の在り方の研究を行った。アナログとICTを効果的に活用し、「課題設定」から「情報収集」、「整理・分析」、「まとめ・発表」までの一連の学習過程を構造化することで、インプット・エディット・アウトプットの循環を確立し、学びを深める授業づくりを研究した。授業では導入・展開・まとめを明確にし、生徒が学習方法を選択できる場を設定することを目指した。また、基礎学力の定着を図るために、金曜日の朝読書時間にAIドリルを活用した選択学習を行った。さらに、笛川ノートを活用して授業と家庭学習を結び付けるとともに、WEBQU分析による生徒理解を基に授業改善を進めた。加えて、アドバイザーを招聘した研究会やDXを活用した授業公開を通して、実践の充実と教職員の指導力向上を目指し研究を行った。

（1）授業の構造化と一人一実践による研究
　　導入…生徒に見通しを持たせる提示
　　展開…生徒が学習の仕方を選択できる場面の設定
　　まとめ…授業の振り返り、記録
（2）ICTを活用した深い学びにつなげる選択学習
　　毎週金曜日の朝読書の時間にAIドリルを活用した学習を実施する。
（3）笛川ノートを活用した授業と家庭学習の結びつけ
　　スタンバイの時間に笛川ノートに家庭学習の内容を具体的に記述する。
　　土日は各自ノートを用意し自主学習を行い、休み明けに提出する。
（4）WEBQU分析を活用した生徒理解と授業改善
　　WEBQUを実施し、学年指導部会で分析を行い、全体で共有を行う。
（5）DX推進のための研究と実践授業の構造化と一人一実践による研究
　　文部科学省学校DX戦略アドバイザーを招聘しての研究会を行う。
　　DXを活用した授業の公開を行う。

2　具体的実践

＜一人一実践の具体＞

（1）授業開始時に、子どもたちと本時の目標（ルーブリック評価を含む）、活動内容を共有した。本時の授業のねらいによっては、探究のサイクル（【課題設定】【情報収集】【整理・分析】【まとめ・表現】）を用いて、子どもたちの思考・行動の流れを示した。子どもが毎時間、自分の目標設定と振り返りを行うことを続けた。
（2）生徒が疑問をもち課題を発見できるような導入、根拠をもち仮説を立てることができるような展開を意識して取り組んだ。
（3）前回の実験をもとにして、本時の見通しを持たせた。
（4）スライドで授業の目標確認と学ぶことや流れ、ルーブリックなどを確認した。
（5）展開の意見共有の場面でCanvaを使用した。
（6）アナログとデジタルのバランスを考え、生徒が主体的に取り組める課題を設定した。
（7）スプレッドシートへの入力と、振り返りを他者参照できる形にした。

Ⅱ　成果と課題

1　授業の構造化と一人一実践による研究

授業の構造化を意識し、本時の目標やルーブリック、学習の流れを共有するとともに、探究のサイクルを用いて思考過程を可視化したことで、生徒が見通しをもって学習し、毎時間の目標設定と振り返りを継続する基盤を築くことができた。また、Canvaやスプレッドシートを活用し、他者参照や振り返りの充実も図れた。一方で、単元による活動の差から教材研究の重要性を実感し、構造提示と気づきの両立、振り返り時間の確保など時間マネジメントが課題として明確になった。

2　ICTを活用した深い学びにつなげる選択学習（AIドリルの活用など）

授業終盤の自己選択学習の場面で、数名の児童がAIドリルを含めた学習方法を自分で選び、主体的に学習を進める姿が見られたが、一方で、教科の学習として広がりをもたせることができなかった。今後はAIドリルの内容や活用方法をさらに研究し、自己選択学習や単元全体の中に位置付けることで、より多くの生徒が深い学びにつなげられるよう工夫していく必要がある。

3　笛川ノートを活用した授業と家庭学習の結び付け

笛川ノートの活用自体は行われていたものの、学習の記録として十分な成果が見られたとは言えない。家庭学習やスタンバイ時間の取組が作業的になり、授業内容との結び付きが弱かったことが課題である。今後は、明確な宿題の設定や振り返りの観点を示すなどの工夫により、授業と家庭学習を関連付けた活用を進めていく。

4　WEBQU分析を活用した生徒理解と授業改善

WEBQUの結果や学年分析を活用することで、主観に偏らず客観的な指標として生徒理解が深まり、日頃の生徒対応や個々へのアプローチに役立てることができた。分析結果を生徒理解の参考にはできているものの、授業改善や具体的な指導方法への反映までは十分に行えていない点が課題である。今後はWEBQUの結果を授業設計や指導の工夫と結び付け、学級・授業全体の改善により効果的に活用していく。

5　DX推進のための研究と実践授業の構造化

チャット機能の活用による業務・学習の効率化が進み、探究のサイクルやICTを生かした個別最適・協働的な学び、さらに授業DX・校務DXを学校全体で推進できた。校務のDXは進展した一方で、授業の構造化については研究と実践がまだ十分とは言えない。デジタルとアナログの強みを適切に組み合わせ、生徒の主体的な学びを深める授業構造の研究と実践を継続的に進めていく。

Ⅲ　成果物

1　一人一実践事例

2　Q-U分析によるアセスメント・対応策シート

3　LDXスクール事業実践事例（PBL研究授業・授業DX・校務DX）

4　学習評価規準

（研究主任　名取政也）

塩山中学校

「主体的に学ぶ心豊かな生徒の育成」

～集団づくりを基盤とした協働的な学び等による学力向上への取り組み～

Ⅰ　研究の内容

甲州市では国や県の施策を受け、地域に根差した教育を推進するための取り組み（平成23年10月発足の「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」）が、昨年度より「甲州市 夢をかなえる学びのプロジェクト委員会」と名称が変更され、これまで行ってきた集団づくりや授業改善を継続しつつ、新たな柱として加わった「クラウド環境を前向きに活かす」「子ども一人一人が主語」の実現に向けた取り組みを通じて、個別最適な学びと協働的な学びの日常化に向けた授業づくりを目指している。これまでの授業観を大きく転換する過程での困難を伴いながらも、実践を重ねる中で教職員や生徒に新たな授業形態が着実に浸透しつつある。

本校の現状については、市のプロジェクトの基盤となる「集団づくり」において、日常の指導や生徒会活動を通じた挨拶・返事などのコミュニケーション、マナーの遵守を大切にしながら、互いに協力し、支え合いながら充実した学校生活を送る姿が確認できる。また、ＷＥＢＱＵの分析において「満足群」の割合が全国平均を上回っていることから、落ち着いた学校環境であると客観的に捉えることができる。しかし、不登校生徒の状況については、長期欠席者の人数が減少に至っていない傾向にある。生活習慣や自律神経の乱れによる体調の変化が主な要因であるが、友人関係の問題や集団生活への不適応に起因することも多い。

学力面では、全国学力・学習状況調査や県学力把握調査において実施したすべての教科が平均点以上であり、生徒の学力向上に対する取り組みの成果が表れてきている。加えて、生成ＡＩパイロット校の指定を受け、これまで進めてきたＩＣＴ端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業研究を深化させ、生成ＡＩの活用にも積極的に取り組んできた。甲州市が「学校情報化先進地域」の認定を受けていることもあり、本校は効果的なＩＣＴ活用の研究を推進し、地域へ発信していく役割を担っている。

以上のことを踏まえ、今年度も「集団づくり」を基盤とした「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業づくりの実現と、さらなる学力向上を目指した研究を進めてきた。

＊研究の柱となる具体的内容と方法

「ＳＵＮ（ステップアップノート：自主学習ノート）」、「ＳＵＴ（ステップアップテスト：五教科の小テスト）」、「一人一実践」、「ＷＥＢＱＵの活用」、「ＩＣＴ端末の活用」（生成ＡＩの活用）

１　ＳＵＮとＳＵＴの効果的な活用を検討

(1)　「スタンバイの時間」における課題設定の手法を研究し、学習内容の充実を図る。

２　「一人一実践（ステップアップ授業）」の推進

(1)　全教職員が授業を公開し、相互参観を通じて各教科の指導力を高める。

３　ＷＥＢＱＵ調査の分析と生徒理解

(1)　市のプロジェクトにおける「各校の取り組み内容」を参考に「対応策シート」を作成・実践する。分析結果を全職員で共有し、組織的な支援体制を構築する。

４　ＩＣＴ端末を活用し、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業づくり

(1)　「めあて」「ルーブリック」「本時の流れ」を Google Classroom 上に提示することを常態化し、生徒が見通しを持って学習に取り組む流れを定着させる。

(2)　「振り返り」と「自己評価」の時間を十分に確保する。クラウド上での共有を通じて生徒同士の相互参照を促すとともに、文字数カウント機能を活用してアウトプットの量的拡大と質の向上を図る。

(3)　生成ＡＩの活用について、校務利用・学習利用の両面から実践し、知見を共有しながら効果的な活用方法を研究する。

Ⅱ　成果と課題

1　ＩＣＴ端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業について

今年度は生成ＡＩパイロット校の指定を受け、昨年度から取り組んできたＬＤＸを継続しつつ、生成ＡＩの活用という新たな研究に着手した。これまで実践の基盤といえる Google Classroom およびクラウドを活用した授業づくり。「振り返り」の時間確保によるアウトプットの質・量の向上を目指した授業づくりの取り組みは、転任してきた教職員にも円滑に共有され、組織的な定着が見られた。また、各教科の特性に応じた活用も深化し、継続的な実践を展開することができた。

生成ＡＩの活用については、校務利用・学習利用の両面から効果的な活用方法を模索し、教職員が積極的に実践・情報共有を行うことで研究を深めた。さらに、昨年度学校ＤＸアドバイザーであった山梨大学准教授の三井一希先生を講師に迎え、ＬＤＸ指定後の状況を踏まえた的確な助言をいただいたことは、本校の研究の方向性を再確認する貴重な機会となった。

【成果】

先進校の視察を通じて得た効果的なＩＣＴ活用の手立てを職員間で共有したことにより、授業力の向上や業務効率化に寄与することができた。また、協働的な学びにおいて「誰と学ぶか」を焦点化した研究では、生徒が課題の内容や自身の習熟度を踏まえてパートナーを選択する姿が見られるなど、学びの主体性が向上した。生成ＡＩについても、自ら積極的に活用して学びを深めようとする生徒が現れ始めている。

【課題】

生成ＡＩの活用に関しては、教職員・生徒ともにリテラシーや活用スキルの習熟度合に差がある様子が伺える。今後も継続して、より高度で効果的な活用方法について研修を深める必要がある。また、学級づくりにおいては、ＷＥＢＱＵの調査結果を基に、集団不適応やコミュニケーションに課題を抱える生徒への個別の支援と、誰もが参画しやすいＩＣＴ環境の構築を並行して進めていく必要がある。

2「ＳＵＮ(ステップアップノート)」「ＳＵＴ(ステップアップテスト)」の取り組み

学力向上を目指し、市のプロジェクトと連携して通年で実施した。ＳＵＮの実践により学習習慣の定着が見られ、さらに今年度は「ロングスタンバイ」「ステップアップタイム」という名称で実施したＳＵＮの質の向上を目指した取り組みを通じ、生徒の意識にも変化が表れている。しかし、活用方法に関しては、生徒一人一人の課題に応じた「個別最適な学び」の観点からさらなる改善の余地がある。個に応じた学力の伸長に向け、活用内容の再検討を含めた研究を継続したい。

3　研究のまとめと来年度に向けて

本年度は甲州市の「夢をかなえる学びのプロジェクト」を校内研究の基盤に据え、本校の実態に合わせてそれを深化・発展させるべく１年間の研究を推進してきた。ＷＥＢＱＵの分析結果や「心の羅針盤」を併用したことにより、生徒が抱える集団生活の中での葛藤や悩みを把握することが可能となった。また、これらの客観的データを全職員で共有・分析する機会を設けたことで、組織として連携したきめ細やかな指導体制を構築できたことは、次年度も継続すべき成果と言える。

本校研究の主題である「主体的に学ぶ生徒の育成」に向けては、ＩＣＴ端末を積極的に活用し、学習者主体の授業づくりに注力してきた。その結果、学習意欲の高い生徒においては、端末を駆使して自立的に学習を進める姿が定着してきた。一方で、学習に苦手意識を持つ生徒に対してどのような手立てが有効か、という点は依然として継続的な課題である。また、生成ＡＩの活用については、その利便性とリスクを教職員・生徒双方が十分に理解した上で、効果的な活用方法を継続して研究していきたい。

来年度も本年度の成果を継続し、「学習者主体の授業づくり」をさらに深化させていきたい。生徒一人一人の資質・能力を最大限に育成するため、教職員自らも資質向上に努め、全職員が一致団結して組織的な校内研究を推進していきたい。

（研究主任　中村健太）

松里中学校　校内研究

自ら求め、学ぶ生徒の育成

～子供主体の授業づくり・自己調整力の育成を目指して～

Ⅰ　主題設定の理由

学習指導要領では、令和の日本型教育（「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実・「一人一人が主語」である「学習者主体の授業」の日常化）を目指した６点の柱を挙げている。「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するために、教員が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことで効果的な指導を実現すること」が求められている。生徒一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定をし、生徒は学習内容や学び方を選択し、基礎基本となる知識や学び方を身に付ける「指導の個別化」が必要である。また、基礎的・基本的な知識・技能等や、基盤となる資質・能力等を土台として、様々な場面を通じた体験活動から得た生徒の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行うことが求められる。教員が生徒一人ひとりの興味・関心に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、生徒自身の学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、クラウド環境の効果的な活用も含め、生徒が自分に最適な学び方で、自己調整しながら課題解決に向けて、主体的に学ぼうとする態度を育成することを目指し、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的な内容と方法

１　学びのつながり・学びの広がり・学びの深まり

（１）子供主体の授業づくりを目指した授業の実践

学習形態や学習環境、学習内容を選択させ、生徒一人ひとりが問題解決にむけての目的意識をもち、問題発見・解決能力を伸ばし、「見方・考え方」を働かせることで言語能力・思考能力を高め、それぞれの教科等の目標を実現するとともに、情報活用能力の向上を図った。

（２）探究のサイクルを意識した授業づくりの追究

自己の学びを振り返りながら、考えを更新して試行錯誤を続けることを意識した学習活動を行った。授業後の振り返りでは、「わかったことやできたこと」「今後どうしていきたいか」「学び方はどうだったか」を明確にして、メタ認知能力を身に付け、自己調整力を高められるような工夫を行った。

２　学びの基盤づくり

（１）５C を意識した５ba の取り組み

松里中学校で大切にしたい５C をもとに、５つの取り組みを行った。「夢をかなえる」ための「場」として 「５ba」に取り組み、学びの基盤づくりを行った。

（２）WEBQU の実施と結果分析

学級・集団づくりの質の向上のため、WEBQU を実施した。「人」や「もの」を大切にする心を育て、仲間とのつながりを意識した学級経営を模索し、「感謝」の気持ちを伝え合える安心感や信頼感のある人間関係（相互依存）の構築を図った。

３　がん教育の推進

今年度松里中学校では、「令和７年度がん教育等外部講師連携支援事業」の推進校指定を受けた。がんに対する正しい知識とがん患者への正しい理解及び命の大切さに対する認識を深めることや、健康と命の大切さについて学ぶことを通して、自らの健康を適切に管理し、望ましい生活習慣を確立していくための資質・能力を育成すること等を目的として、保健・体育科を中心に学校全体でがん教育の推進を行った。

ふりかえりの視点

5C をもとにした
5ba の取り組み

Ⅲ　成果と課題

１成果

子供主体の授業づくりについては、学習形態や環境を生徒自身に選択させる実践を重ね、目的意識を持って課題解決に取り組むことができたという意見が多くあった。授業のふりかえりにおいては、全校統一のシートで「わかったことやできたこと」「学び方」「今後」の視点を明確にしたことが、生徒のメタ認知能力を向上させ、学びを自ら調整しようとする意識の芽生えにつながったと感じる。授業だけでなく、5ba の活動を通して、自身の進度や課題を把握して取り組む場が設定されたことは、自己調整力の育成における大きな一歩となった。

２課題

生徒の自己調整力を確かなものにするためには、個々の学習状況に応じた支援の質を向上させる必要がある。現状では課題設定やふりかえりの記述に個人差が大きく、自己調整が困難な生徒に対する具体的な手立てや、思考を深めるための工夫が求められる。また、ふりかえりの時間を十分に確保し、教員のフィードバックを充実させることで、ふりかえりを次の学習や家庭学習へつなげるサイクルの確立が不可欠である。今後は、基礎・基本の定着と探究的な学びを両立させつつ、生徒が自己調整をして学びに取り組めるよう、授業改善に取り組んでいきたい。　（ 研究主任　　竹川佳那 ）

勝沼中学校

学びを愉しむ生徒の育成

～自立した学習者へと導くための授業づくりを通して～

Ⅰ　主題設定の理由

勝沼中学校では、甲州市夢をかなえる学びのプロジェクトに基づき、確かな学力と豊かな心を育成する教育を推進している。主体的・対話的で深い学びの実現には、質の高い授業と、生徒が安心して学べる学級づくりが不可欠である。生徒を取り巻く環境が変化する中、多様な困難を抱える生徒への支援も重視する必要がある。WEBQU 分析や授業評価シートを活用し、生徒の実態把握と授業改善に繋げていく。校歌にある「学舎は常に愉しく」をキーワードに、生徒が学ぶ喜びを感じられる授業と学級づくりを目指す。

今年度は、リーディング DX スクール事業の指定を受け、GIGA スクール構想を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に推進していく。生徒一人ひとりの学びの過程を把握し、個別最適化された支援と相互啓発を促す授業実践を展開する。これまでの授業観を転換し、全ての子どもの学力向上を目指し、指導力向上に努めていくために、この主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的内容と方法

（１）ICT の活用（各種アプリの活用を含め）
（２）学び舎タイムの計画・実施
（３）CRT 検査や全国学力学習状況調査、県学力把握調査の分析及び指導の改善
（４）甲州市の共同取り組み
　　（ティーチャーズノート活用、平和教育、心の羅針盤、授業の構造化）
（５）継続実践
　・ユニバーサルデザインを意識した学習環境づくり（掲示物やチョークの色等）
　・読書活動の充実（朝読書の実施）
　・家庭学習への取り組み
　・「WEBQU」の実施と分析及び活用

Ⅲ　研究授業の実施

生徒の資質・能力の育成に向けて、ICT を最大限活用しながら、研究副主題である「自立した学習者へと導くための授業づくり」を実現するために、上記研究の具体的内容と方法を踏まえ、教科部会・学年部会などを有効に活用しながら、ブロック交流研究会や一人一実践での研究授業を行った。また、今年度はリーディング DX スクール事業により、山梨大学より学校 DX 戦略アドバイザーの三井一希先生を招聘し、すべてのクラスで授業を行った。年間３回授業観察をしていただき、指導助言をいただいた。

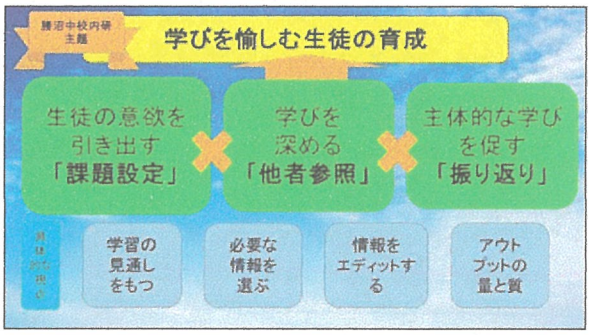
６月１３日（金）第４回校内研　全クラスで研究授業　三井一希先生招聘
９月２４日（水）第７回校内研　全クラスで研究授業　三井一希先生招聘
１１月２６日（水）リーディング DX スクール事業公開授業研究会　三井一希先生招聘

Ⅳ　公開研究授業の実施

１１月２６日（水）に本校を会場に、リーディング DX スクール事業公開授業研究会を開催した。県内外より８０名を超える参加があった。全クラスで授業を公開し、授業後

は各授業の研究会を行った。全体会では三井一希先生より「勝沼中学校の実践から考える学びを愉しむ生徒の育成へ向けた授業づくり」と題して講演をいただいた。

勝沼中 LDX 公開サイト



勝沼中授業づくりの考え方

〈三井一希先生からの指導・助言〉

授業者からの発話を絞り思考時間を確保したことで、生徒の主体性が向上した。多角的な情報収集や生成 AI を思考の道具とする試みを通じ、自身の言葉で解釈し表現する力や、アウトプットの質が着実に高まっている。

生成 AI への依存を防ぎ、思考を繰り返すプロセスを徹底させる必要がある。今後は、情報活用能力の個人差に応じた支援や具体的なフィードバック体制を整え、議論を深めるファシリテーション能力を磨くことが焦点となる。

V　成果・課題・今後の方向性

1、成果

今年度のリーディング DX 事業に関わる授業改善において、各教科で進められた「課題設定」「他者参照」「振り返り」の取り組みは、ICT の有効活用によって大きな成果を上げた。具体的には、スプレッドシートやスライド、GeoGebra、AI アプリ等の活用により、即時的な振り返りや自由進度学習といった「個に応じた学習のペース調整」が可能になった。また、仲間の考えをリアルタイムで共有・比較する「他者参照」が日常化したことで、多様な視点から学びを深める協働的な学びの土台が構築された。これにより、教員が教え込む授業から生徒に活動を委ねる授業へと指導の視点が転換し、常態的な授業改善と質の向上が図られた。さらに、毎時間の振り返りをデータとして蓄積・可視化したことで、生徒自身が成長を実感するとともに、教員側も即時的な中間指導を行える体制が整った。

2、課題

解決すべき課題も明確になっている。ICT 活用の増加に伴い、漢字を書く機会の減少など「基礎的な書く力」の定着に懸念が生じており、学力維持の観点から対策が必要である。また、仲間の意見を安易にコピーして自分なりのエディットを行おうとしない場面や、グループの固定化によって学びの深まりを欠く場面があった。さらに、端末に向き合う時間が長くなることで、リアルな対話や実技、運動量が減少するといった「アナログとデジタルのバランス」も再考の余地がある。生徒のアウトプットが増大した分、教員側のフィードバックや評価にかかる時間と労力の負担感が増しており、効率的な評価の方法や、生成 AI の活用が次年度への重要な検討事項となっている。

3、今後の方向性

今後は１つ目に、自ら問いを立て探究する主体的な学びを支える課題設定で生徒の内発的動機付けを図る。２つ目に、生徒が自身の学びを客観的に捉え、自律的に調整できるようにするために、ルーブリックを具体的な姿がイメージできる内容へ改善する。３つ目に、授業者による意図的な問いかけを通じて、生徒に深く考えさせ、アウトプットの質と量を追求する。デジタル学習基盤の活用による即時的な助言で記述を深め、情報の羅列ではない真の思考力・表現力を育成していく。

（研究主任　中村大介）